【 7 】

氏　名	大　羽　　蓁（おおば　しげる）
学位の種類	文　学　博　士
学位記番号	論文博第35号
学位授与の日付	昭和44年1月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**視空間知覚における認知的過程の研究**
論文調査委員	（主査）教授 園原太郎　教授 野田又夫　教授 井島　勉

論文内容の要旨

本論文は視空間知覚における現象的諸特性を規定する内外の諸要因の関係を，主として所謂恒常性の回帰傾向の吟味によって詳細に検討し，これに統一的な説明を与えるため機能主義的立場より体系化を試みたものである。

第1章より第4章に亘って，著者は知覚の意義について理論的考究を行なう。即ち現代心理学における機能主義的立場と目される諸学説を発展的に系統づけ，特に著者も最も影響を与えたトランズアクショニズムと確率的機能主義とについて，その理論的枠組を詳細に検討叙述している。これらの考究を通じて著者は，知覚は「プロバブルな意味を理解」する認知的活動であり，現前の事態を過去の因果的複合に基いて妥当な対象的関係に達成する cue の確率的適用であるとする立場を明確にし，set の概念を導入して著者の実験的研究の問題設定を行なっている。

第5章より13章に亘っては，如上の視点から展開される諸側面について，自家の実験的研究を中心に，主として恒常性判断に及ぼす主体の内的過程に関して綿密な論考がなされている。これらの実験は還元視空間における外的・内的諸要因の分析，特殊な視空間における知覚の特質の吟味，発達的および人格的側面よりのアプローチ，知覚判断における主体的変数の検討など，多岐に亘っているが，その中でも β 運動の最適時相を規定するとされた現象的距離の概念を再吟味し，現象的距離と刺激配置条件との対応を審かに検討して，恒常性が常に恒常則と網膜法則への回帰の「妥協」として出現することを指摘した研究（第5章），長さの再生的恒常判断が還元状況においてもかなりな恒常度をもってなされ得ること並びに初めに与えられる手がかりの影響の大なることを示した実験（第6章），テレヴィジョンの如き媒体における形の恒常性の研究において現実性と恒常性との関係につき問題を示唆した結果（第9章），発達的見地より恒常性を検討し，幼児において視角的要因への回帰がより顕著で恒常性は発達的に達成されるものであろうとの結論に達した研究（第11章）等に注目さるべきものである。

これらの実験的研究は常に関連する諸家の諸知見諸考察を網羅して論考され，機能主義的アプローチの

有効性を支持するデータとしてその意義が強調されているが，同時に尚多くの条件の分析と，事実的知見の集積の必要なることの指摘を忘れていない。

論文審査の結果の要旨

視空間知覚の現象的特質，殊にその所謂恒常性についての研究は，現代心理学における中心問題のうちでも最も根幹的なものの一つとして，実に夥しい数に上っている。著者の実験的研究は多岐に亘るとはいえ，個々にみればその大海の中の片々たる断片に過ぎないかもしれないが，著者が広く文献を渉猟検討し，視空間知覚を一つの認知的活動として研究する立場を理論的に発展させ，この展望のなかに自家及び諸家の研究結果を批判位置づけ，体系的構想を基礎づけたことは，実験的事実が粉糾している現状においては却ってその意義が認められるといい得る。

著者のとった機能的立場は研究の出発点としての視点の定位であり，同時に又実験結果の解釈に当っての説明的立場である。理論的にこの立場において人間行動の適応的性格を捉え，知覚活動が経験の中に成立する可塑性に富む認知的枠組の適用によって現前するという見解は，一ケの見識として尊重されるが，それだけに概念の明確化に実験的検討を要する幾多の本質的問題点を蔵している。矛盾する他者の研究結果の評価に当っては，更に慎重にして公平なる実験的吟味が必要であろう。著者の論考において，この点にいささか早断にすぎるとみられるものもあり，著者自身もいう如く今後の条件分析，事実的知見の集積が望まれる。しかし，複雑なる現象的知覚特質を認知における和解的達成として捉え，その解明に，cue の選択，set の形成，確率的達成，人格的特質等の要因を導入することによって，一応系統的なアプローチの体系を展開した業績は，著者自身によって指摘されたいくつかの実験的新知見とともに，現時点においては高く評価されて然るべきである。

よって本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。